

『育てることの困難』

高石恭子編（人文書院、2007年2月）

文学部教授・学生相談室専任カウンセラー 高石 恭子

甲南大学の誇れる伝統の一つに、心理臨床学の専門性に基づいた、地域への相談活動の貢献がある。なかでも、松尾恒子先生（本学名誉教授）が30年以上前に創始した母子臨床の実践は、現在のカウンセリングセンター・心理臨床カウンセリングルームにおける子育て支援プログラムと、人間科学研究所におけるリサーチとして、今日に受け継がれている。

本書は、そのような流れのなかで、文部科学省学術フロンティア事業の助成を受け、2005年から2006年にかけて筆者をコーディネーターとして行なわれた一連の共同研究「育てることの困難」の成果を、人間科学研究所叢書第8巻としてまとめたものである。昨今の親子間での突発的な殺傷事件の頻発、ひきこもる青年の問題や児童虐待件数の増加などに表れるように、今日の「育てること」をめぐる状況はますます困難になっている。それらの現象の奥に通底する問題は何かを、学際的な視点から浮き彫りにしようとした論集である。

執筆者には、本学文学部社会学科（家族史、人口学）の中里英樹氏、人間科学科（臨床心理学）の穂苺千恵氏、カウンセリングセンター相談員・文学部非常勤講師の内藤あかね氏も名を連ねるほか、教育学者の汐見稔幸氏、精神科医の斎藤環氏、コミュニティワークを専門とする武田信子氏、教育相談のセラピストである古屋敬子氏が並ぶ。

ところで、学生相談を専門とする私が、なぜこのような内容の編書を上梓するに至ったかについては、若干の説明が必要かもしれない。

縁あって、私は30代にして本学に職を得、その後2人の子育てを経験することになった。何しろ当時としては、“前例のない”ことばかり。

行き当たりばったりの私を温かく見守り、助けてくださった先輩教職員の皆様には、この紙面を借りて感謝を申し上げたい。

そんななか、“子育て中のカウンセラーだから”という理由で、さまざまな関連の仕事が舞い込んでくるようになった。子育て本の翻訳、インターネットサイトの子育て相談、子育て講演などなど。所属する兵庫県臨床心理士会では、子育て支援委員長という役割まで与えられ、行政の子育て支援施策や法律について学ばなければならないめぐり合わせとなった。しかし、時代は少子化対策一色。子育て支援といえば、出生率アップを目指した手当や一時金の支給、保育所拡充を意味する現実に触れ、私は違和感を募らせていったのである。

一方、日々の学生相談室の活動においては、わが子が大学・社会に出て行けないことを悩んで来談する保護者の方々とお会いする機会が年々増えていった。すでに成人し、学力にも特に申し分のない学生が、巣立っていけない。それは、“青年期の問題”というよりは、親の子別れの難しさも含め、乳幼児期からの親子関係——すなわち、「育て—育てられる」関係のありよう——が一貫して関わる問題だと意識するようになった。子育ては、乳幼児期や学童期までの問題ではない。誕生から巣立ちまでを一続きに捉え、どんな次世代を育てたいのか、という社会の使命を問うところから考え直さなくてはならない。

本書は、そのような問題意識を強く反映した内容となっており、巷に溢れる育児本や子育て支援の研究書とは趣を異にしている。学生にかかわる多くの教職員の皆様、これから巣立っていく学生諸氏に、広く手にとっていただきたい一冊である。